

黙示録3章14－22節 「豊かさの呪い」

1A 生ぬるさ 14－16

2A 自己満足 17－19

3A イエス様との食事 20－22

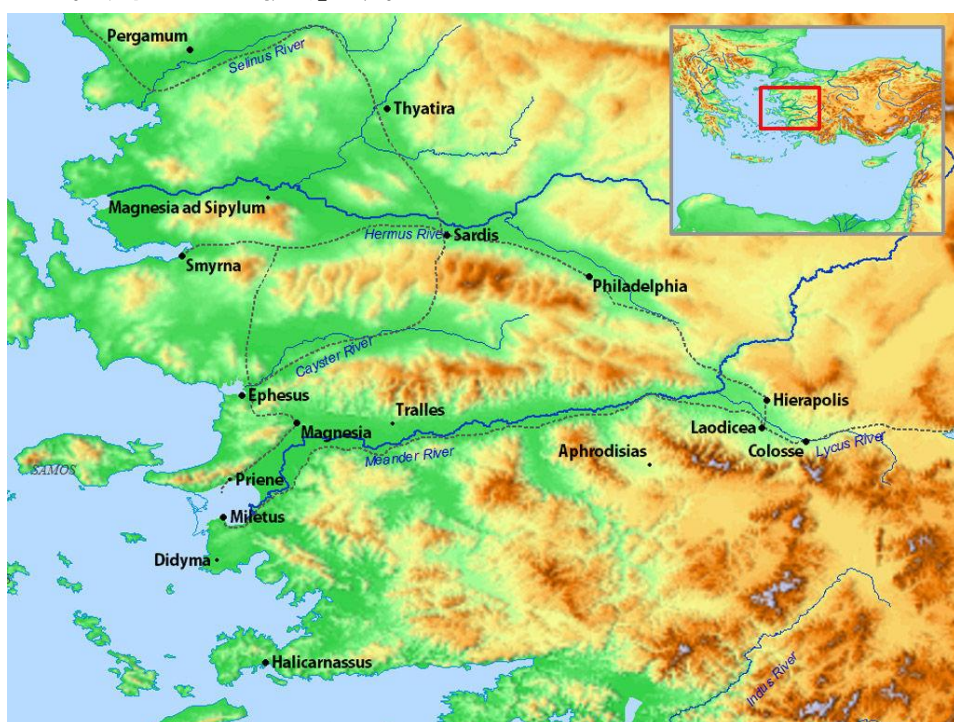
本文

黙示録 3 章を開いてください、今晚は、3 章 14 節から読みます。ついに、私たちの黙示録の学びは、七つの教会の最後になりました。「ラオデキヤの教会」です。

ラオデキヤの町は、フィラデルフィヤから約 65 ㎞南東に位置する、裕福な町でした。三つの都市が集まっていますが、コロサイが東に、ヒエラポリスが北にあります。ギリシャのセレウコス朝アンティオコス二世によって建てられて、妻の名ライディケにちなんで名づけられました。

町はフルギヤ地方にある重要なところで、メンデルス川の支流リュコス川沿いにあり、

150 ㎞先のエペソからシリアへの幹線道路やその他の道路が交わる、交通の便が良いところがありました。交通の便利さから、ローマ時代は商業や経済の発展に恵まれ、銀行の中心地でした。さらに、産業は羊毛が盛んで、黒紫色の光沢のある柔らかい羊毛が取れたと言われています。遺跡を見ますと、豪華絢爛な寺院や劇場が立ち並んでいたことを伺えます。そしてラオデキヤには、有名な医学校があり、そこで知られていたのは目薬だったそうです。もちろん、ギリシャ神話の医療の神「アスクレピオス」の神殿もありました。また、ここはアンティオコス三世が多くのユダヤ人をここに移住させていた、ユダヤ人が社会の中で地位を得ていたので、エルサレムの神殿に献金することも許されていました。そこで、宗教の自由が他の地域に比べれば保障されていました。そしてこの町では迫害も少なかったようであります。



ラオデキヤの町の歴史の中で、有名なのは紀元後 60 年に起こった地震であります。それで町

が破壊されたのですが、皇帝からの援助の申し出を受けなかったそうです。「私たちは自分たちで町を再建することができます。」と断っています。それだけ自分でやっていけるという自負を持っていて、事実それだけの富と力を持っていました。

パウロが宣教旅行でそこを訪ねた記録はありませんが、コロサイ人への手紙で、その隣接する町であったラオデキヤの教会の人たちのことも念頭に入れて、書いていたことが分かります。「コロサ 2:1 あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」「4:13-15 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦闘しています。愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。」非常に苦闘している、福音のために苦闘している、ということを訴えています。ラオデキヤが労苦していない状態をイエス様がこれから叱責していかれますが、パウロが手紙を書いた時にはすでに、ラオデキヤの町にある安定した、裕福な状態が彼らの精神をも蝕んでいたのかもしれない。

そうすることで、ラオデキヤの教会は最も今の時代の教会の霊的危機をよく表しているところです。すなわち、「物質的に裕福で、便利で、自由も保障されているため、神とイエス様を必要としなくても生きられる教会」ということです。教会なのに、イエス様を締め出してしまう教会です。根本的なところで、信仰の本質を破壊してしまうような要素を持っていたと言えます。

1A 生ぬるさ 14－16

4 また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。

「ラオデキヤ」という町の名ではありますが、そのままの意味は「人々の支配」とか「人々の義」という意味になります。これはもちろん、アンティオコス二世の妻にちなんだ名前なのですが、けれども、その町の状況をよく表しています。神による支配ではなく、人間中心の支配です。神の義ではなく、人の義、人は良いのだということです。

イエス様がこの教会で現れた姿は、二つあります。一つは、「アーメンである方、忠実で、真実な証人」であるということ、もう一つは、「神に造られたものの根源である」ということです。一つ目からお話します。アーメンというのは、ヘブル語で「まことに、真実に」という意味です。旧約聖書では、ユダヤ人が祝福に応答したり、主の語りかけに対して応答する時に使われ、新約聖書でも、同じように使われています。「然り」と訳されたりしますね。「そのとおりです」という意味です。

けれども、民が神の言われていること、神の真実に応答する時に使われるだけでなく、神ご自身

が真実な方であることに使われます。イザヤ書 65 章 16 節に、「この世にあつて祝福される者は、まことの神によって祝福され、この世にあつて誓う者は、まことの神によって誓う。先の苦難は忘れられ、わたしの目から隠されるからだ。」ここの「まことの神」が、「アーメンにある神」となっています。そしてイエス様ご自身が、「まことに、まことに、あなたがたに言います」と言われた時には、「アーメン、アーメン、わたしはあなたがたに言います。」となっています。つまり、イエス様はアーメンの神としてわたしは語ります、と言われているわけです。そして、「忠実で、真実な証人」でありませんが、これは 1 章 5 節にも、イエス・キリストが「忠実な証人」として出て来ました。つまりイエス様はここで、ご自身をアーメンなる父なる神と一つであり、そしてそのことを忠実に証した者ということとであります。

なぜイエス様が、ラオデキヤに対してこのような形で現れたかと言いますと、彼らが神の真実に触れようとしないという問題があったからです。自分の考えていること、自分の感じていることを優先して、心の中で神の真実を受け入れていないのです。真実また真理に触れるならば、そこで私たちの心は奮い立ち、燃やされるようになって清められ、強い反応、強い応答が生まれるはずなのです。それが、心が鈍くなっており真理を聞いていないという問題があるからです。

そして、「神に造られたものの根源」であります。これは良い訳です。全ての被造物の源になっておられる方ということであり、創造主ご自身であることを示しています。ラオデキヤの人たちも読むように勧められていたコロサイ人への手紙で、パウロはこう話しています。「コロサイ 1:16 なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」そしてどうして、こんなことを主は語っておられるのか？そう、全ては主によって与えられているということをラオデキヤの人たちが拒んでしまったからです。すべての富や知恵、恵みというものは、神からの賜物であり、神とキリストこそが全ての源です。この方に立ち返ることこそが、生きる道であるのに、それらの豊かな賜物の中に溺れて、その源を心から退けているからに他なりません。

15 「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。16 このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

イエス様は、全ての教会に「あなたの行ないを知っている」と言われました。それは、慰め、ほめる言葉もありましたが、叱責する言葉もあります。ラオデキヤはサルデスと並んで、称賛する言葉はなく、叱責する言葉のみを主は語られました。ここでは、これまでの教会の中である意味、最も深刻な問題を取り上げておられます。「冷たくもなく、熱くもない」ということです。

ラオデキヤの町は、水の確保の問題がありました。温泉でも有名であった、ヒエラポリスにある水源から10^{キロ}もある長い水道路を使って、この町に引いていました。温泉ですから、ミネラル、鉱石を多く含んでおり、かつラオデキヤに運ばれてくるまでには、生ぬるくなっています。したがって、非常に硬い水、しかも生ぬるいということで、吐き出したいほどの不味さだったようです。今も、水道管の遺跡がたくさん発掘されていますが、その中にカルシウム類が分厚く沈殿しているものが、発掘されます。



イエス様は、「あなたが冷たいか、熱いかであってほしい」と言われていますが、今話しましたように、ヒエラポリスは温泉が出て、それで熱い水にあずかることができました。そしてコロサイの町は、雪の降る山の麓にあって、そこに流れる水は新鮮そのもの、冷たいものでした。ですから、ラオデキヤの人々にとって、この説明は、ものすごく響きます。熱いか、冷たいかであってほしい。生ぬるいから吐き出す、と。これはイメージとしては、「生ぬるいコカ・コーラ」でしょうか。または、「生ぬるいコーヒー」でしょうか。コーラなら冷たいの、コーヒーなら熱いのを欲しますが、生ぬるいのは吐き出してしまいます。

これは、「真実な方、アーメンである方」として現れたイエス様に応答していない状態です。何となく、上手にクリスチャン生活をやりくりしている、と言ってもよいでしょう。ある人が、「エコ生活クリスチャン」という題名を付けていましたが、自分の生活は楽しんで、それであまり関わることのないように、ほどほどにクリスチャン生活をする、ということでしょう。自分のしたいこと、やりたいことが楽しくて、けれども形としては祈っているし、聖書も適度に読む、教会も行っている、という状態です。もっと簡単に言うと、「問題のないクリスチャン」です。問題がないと感じていない人が、最も問題なのです！イエス様の真実に触れれば、その御言葉に触れれば、必ず自分は反応するはずです。「うわ～、自分はなんて罪深いのだろうか？」とか、「ええっ、こんな見方をイエス様はしておられるのだ！」とか、人知をはるかに超えた、その凄まじい真実に出会えます。そして、祈りも心がこもります。主の憐れみの御座の前に来ているのだ。だから、この方にすぐるようにしてお語りできる。また、愛する方として、清純な花嫁として近寄れるという感動があるはずです。ところが、どちらでもないのです。

反発することと、無関心であることは、どちらが、心が頑なでしょうか？反発すること、反対すること、迫害することのほうが酷いと思われるでしょうか？いいえ、無関心こそが真理への敵なのです。終わりの日にバビロンの姿が黙示録18章に出て来ますが、そこでは、商業によって潤っている都の姿があります。そこに対して、主が一日で滅ぼすという裁きを行われます。そうでもしなけ

れば、気づかない心の鈍さがあったのです。あるいは心が、ガラスのような堅さであれば割れるけれども、ゴムのような軟弱さがあれば、何をやっても壊れないというのと似ています。もしゴムのような強情さであれば、主はそれ自体を火の中で燃やしてしまうのでしょう。それがここで主が言われている、「生ぬるさ」であります。

2A 自己満足 17-19

17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。18 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

ラオデキヤの町において、地震が起こった後に、皇帝からの援助を断った話を思い出してください。「私たちだけでできますから、助けは要りません。」という態度です。それに象徴されるような態度がここに書かれています。「私は自分で何とかやっていける財産もありますから。」という、自存心という態度です。自分で存続できますから、ということです。だから、祈りも必要としなくなります。祈っても、形式だけのものとなります。主からの導き、御霊の助けは要らない、となります。

そこでイエス様は、はっきりと彼らの自己評価とご自身の評価を対比させておられます。彼らは自分たちは富んでいる、欠けたものはないと言っているのですが、彼らこそが貧しくて、哀れで、盲目で、裸なのだ、と強く責めておられます。スミルナに対するイエス様の慰めの言葉と正反対です。「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。—しかしあなたは実際は富んでいる。(2:9)」と言われました。

ラオデキヤの者たちは、霊的には惨めな者です。パウロは、「ローマ 7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言いました。そして、哀れな者です。復活がなかったら、パウロは哀れな者だと言いました。「1コリント 15:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」そして、貧しい者です。何も良いものが無い状態、イエス様が「心の貧しい者は幸いです。」と言われた貧しさです。そして、盲目は霊的に見えていない状態です。使徒ペテロは、「2ペテロ 1:9 これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。」と言いました。そして、裸の者というのは救いによる義を身に付けていないということです。イエス様が、王子の祝宴について、正装を身に付けていない人をそこから追い出したことを話されましたね。

そこで主は忠告しておられます。「豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いな

さい。」と言われました。ラオデキヤは、金融業が盛んでした。それで金貨も豊かにあったのですが、そうではなく、「火で精練された金をわたしから買いなさい」とイエス様は言われます。イエス様こそが、そしてイエス様を信じる信仰こそが、彼らの持っている純金より尊いのです。ペテロ第一 1 章 7 節に、「信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称赞と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」とありました。

次に、「あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。」と主は言われますが、ラオデキヤは、黒紫の着物がブランドだったのですが、白い衣を買いなさいと命じられます。彼らは物質に頼っていて、イエス様の救いでさえも、その義と聖さでさえも、そんな必要ではないと思っています。しかし、私たちがいかに罪深く、失われていて、滅びるしかない存在であるかを知っていれば、自ら願って、白い衣を身に付けたいと願うはずです。

そして、「目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」と言われますが、目薬がこの町は有名でしたが、霊的に開かれるための目薬をわたしから買いなさいということです。パウロが祈りました。「エペソ 1:18-19 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるよう。」聖霊に拠れなければ、神の国や、復活の力もどちらも分かりません。だから、聖霊によって知ることができるようにと祈っています。

19 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

ここが大事ですね、イエス様がなぜこのように叱っておられるのか？懲らしめておられるのか？それは、「愛している」からです。「ヘブル 12:5-6 わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」ここも、今の社会、とても騙されています。自分のことを否定された！と言って、怒っている社会です。ですから、腫れ物にさわるようになり、誰も自分がそういつて糾弾されることを恐れて、何も言えなくさせられている社会になっています。しかし、真実な愛は、真実を語る愛です。イエス様が、ご自身が十字架に向かうことを弟子たちに語られて、ペテロがそれを諫めた時に、「下がれ、サタン。(マタイ 16:23)」と言われたその言葉です。ペテロは良かれと思っていったのでしょうか、しかし心は高慢になっていました。イエス様は、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と続けて言われました。神の事を思わないで人のことを思っている時に、実はサタンから感化された思いを語っているということになります。

そして、悔い改めます。ただ悔い改めるのではなく、「熱心になって」悔い改めます。ラオデキヤの人たちは、ここが問題でした。心が伴っていないのです。だから、「ああ、悔い改めの祈りをすれ

ばいいんですね。」と心を込めないで祈ることがいとも簡単にできてしまったからです。心を込めて、思いを直しなさいと命じられています。私たちの心は、先ほどみたように自分を騙してしまいます。悔い改めたと思っていても、実は口先だけになっている。だから、また繰り返す。気持ちは後悔しているのですが、思い改めていないのです。

3A イエス様との食事 20-22

20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

ここからが回復の約束です。まず、「わたしは、戸の外に立ってたく。」と言われています。つまり、ラオデキヤの教会においては既にイエス様がおられなかった、ということです。エペソにおいては、イエス様がその燭台を取り上げると言われて警告しておられましたが、彼らは既にその燭台が取られていたのです。物質的には満たされていたけれども、そこにイエス様、万物の根源なるかた、真実な方がおられなかったのです。そして、「立ってたく」と言われていることに注意してください。イエス様が離れたというよりも、彼らがイエス様を締め出したのです。イエス様のほうは、その中に入りたいと願っておられます。

そして、「だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら」と言われます。だれでも、というのが素晴らしいですね。どんなにイエス様から離れても、誰でも主のもとに戻ることができるのです。そして、「わたしの声を聞いて」とあるように、主の声を聞いているのかどうか？が大事であります。映画「沈黙」では、神がなぜ沈黙しておられるのか？という問いかけでありましたが、質問が間違っています。「なぜ、私たちが主の声を聞こうとしていないのか？」であります。私たちが、この方にひれ伏し、心を開くということが大事で、そうすれば御声が聞こえます。そして、「戸をあけるなら」であります。自分の主体的な行為が必要です。求めなさい、見付けなさい、捜しなさい、と主が言われました。私たちは、自然発生的に主が何かをしてくださると思っていますが、主は、私たちが求める中で、そのへりくだった心と共に働いてくださいます。

そして、「彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」と言われます。当時は、共に食事をするとは、最も親密なこととされていました。同じ食べ物が互いに体内に入ります。それで、互いに一つになっているという事を象徴的に表していたのです。ですから、イエス様が親密に交わってくださるということを表しています。ダビデは、この主との交わりを、食卓に招かれた客として描いています。「詩篇 23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」敵前でさえ、主が共におられ、自分を祝福してくださるというそのご臨在であります。

21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わた

しの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

これは、御国における約束です。千年間のキリストの統治の時に、主が約束しておられたことです。「黙示 20:4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」ここの初めの部分、「多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。」が、教会に与えられている約束であります。主が、死にまで忠実であったゆえに、神が甦らせてくださり、天に引き上げ、そしてご自分の右の座に着かせました。同じように、イエス様が私たちをご自分の近くに引き寄せ、与えられている座に着かせてくださいます。そして、地上に主が戻られて神の国を立てられる時、私たちも主と共に統治するのです。

この大きな恵みについて、20 節に書かれている共に食事をするということに、実はつながっています。メフィボシェのことを思い出してください。ヨナタンの息子です。ダビデがヨナタンと契約を結んでいました。彼に恵みを施し、その子孫を滅ぼすことがないようにという願いをダビデは聞きました。そこでメフィボシェは、自分は犬のように卑しい者であるのに、ダビデと同じテーブルで食事をする事となったのです。ダビデの子であるキリストの食事にあずかるというのは、こういうことです。王の王であるイエス様、この方の食事の席に着き、まるで王と同じようにみなされる、大きな恵みにあずかっています。いかがでしょうか？ラオデキヤの富など、この栄光の富に比べれば、陳腐な物、ちり芥にしか過ぎません。

22 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』』

ラオデキヤのみならず、全教会に御霊によって語ってくださったことです。私たちは、全ての教会において、御霊による語りかけを受けました。第一に、「初めの愛から離れてしまった教会」を見ました。第二に、「迫害を受けている教会」を見ました。そして第三に、「妥協してしまっている教会」を見ました。第四は、「なすがままにさせていた教会」です。第五は、「無気力、無感覚な教会」です。第六は、「わずかな力でも、忠実な教会」でありました。そして第七は、「神、キリストを必要としない満足した教会」です。

これらが、私たちの教会にも全て語られていて、そして主が来られることを待ち望んでいます。4 章以降は、主によって引き上げられた後の出来事が始まります。